

『構造と診断—ゼロからの診断学』

岩田健太郎(著)

筑波大学附属病院 総合診療科教授 前野哲博

最近、臨床推論に注目が集まり、診断学に関する本が数多く上梓されている。ただ、それらは、臨床診断に至るプロセスを理論的に記述したものや、「○があれば△△病を疑う」といった実践的なマニュアル本であることが多い。本書は、そういった類書と一線を画し、著者の言葉を借りれば「メタ診断学」、つまり「診断する」という行為そのものに焦点を当て、診断とはそもそも何なのか、診断とはいかなる営為なのかを論じた本である。

ひとくちに「診断」といっても、実際の診療では患者ごとに一人ひとり病歴は違うし、いくら調べても診断がつかないことも多い。しかしながら、臨床医は診断がつくかどうかにかかわらず「決断」しなくてはならない。入院させるのか帰宅させるのか、薬を処方するのかしないのか、その場で決めなくてはならない。もっと悩まずに適切に診断をつけ、最良の医療を提供できる方法はないだろうか？ もしも、臨床推論に関する本を片っ端から読みあさり、ハリソン内科学を全部暗記すれば、自信をもって診断をつけられるようになるだろうか？——答えは「否」であろう。

臨床医であれば誰もが経験するこの疑問に、われわれはどのように向き合っていけばいいのだろうか。本書は、そんな命題に正面から取り組んだ本である。とはいえ、本書を通読したらズバリと診断できるようになるわけではない。わかりやすくいえば、悩みの尽きない「診断をつける」という作業について「正しい悩み方」を教えてくれる本である(こう書くと、本書の第3章「正しい診断は何か」を読んだ人から「『正しい』を規定しているのは何か？」とすかさずツッコミを受けそうだが…)。

また本書は、診断力をつけるために、どのような心構えで、どのようなトレーニングを積みばよいのかについても大変重要な示唆を与えてくれる。ユーモアあふれるたとえ話もわかりやすく、これから診断を学ぼうとする学生・研修医、そしてその指導に当たる指導医にも、ぜひ読んでいただきたい。「診断する」という作業に関わるすべての医療者にお勧めの一冊である。

● A5 / 頁 218 / 定価 2,625 円 (本体 2,500 円 + 税 5%)

2012 年 6 月 [ISBN978-4-260-01590-5] 医学書院刊